伊能忠敬関連略年譜

二〇一〇年二月五日改訂

西暦	元号	満年齢	主要な出来事
一七四五	延享二	〇	忠敬、上総国山辺郡小関村（千葉県山武郡九十九里町小関）の名主・小関五郎左衛門家に生まれる。幼名は三治郎。
一七五一	宝暦元	六	母ミネ死去。父貞恒は兄貞詮、姉フサを伴い武射郡小堤村（千葉県山武郡横芝町小提）の実家・神保家に帰る。
一七五五	宝暦五	一〇	父の実家小提村の神保家に引き取られる。
一七五七	宝暦七	一二	常陸国（茨城県）の寺で数学を学んだという。伊能ミチの夫景茂死去。当主不在となる。景茂の子、忠孝生まれる。
一七五八	宝暦八	一三	伊能三郎右衛門家、佐原村の貧民救助のため米五八俵を拠出する。
一七六一	宝暦一一	一六	常陸国土浦の医師のもとで経学医書を学んだと伝えられる。
一七六二	宝暦一二	一七	伊能豊秋、平山季忠の斡旋で、佐原の伊能三郎右衛門家へ婿入りする。
一七六三	宝暦一三	一八	ミチの先夫の子忠孝死去。長女イネ生まれる。
一七六六	明和三	二一	長男景敬が生まれる。佐原村が凶作となったため、窮民を助ける。
一七六七	明和四	二二	田沼意次　側用人となる。
一七六九	明和六	二四	二女シノ生まれる。江戸に薪問屋を出す。佐原村牛頭天王祭礼で紛争。
一七七〇	明和七	二五	江戸の薪問屋類焼。
一七七二	安永元	二七	佐原邑河岸一件（河岸免許争い）起こる。　田沼意次　老中となる。
一七七五	安永四	三〇	間宮林蔵生まれる（安永九年説もある）。
一七七八	安永七	三三	妻ミチと奥州松島へ旅行し、「奥州紀行」を著す。
一七七九	安永八	三四	長久保赤水「日本輿地路程全図」を作る。
一七八一	天明元	三六	佐原村本宿組名主となる。
一七八二	天明二	三七	実父・神保貞恒死去。幕府、浅草に天文台を設置。
一七八三	天明三	三八	七月に浅間山が大噴火、利根川洪水、凶作。堤防の修築に尽力する。領主の津田氏より苗字帯刀を許される。妻ミチ死去（四二歳）。工藤平助「赤蝦夷風説考」を著す（江戸期写本で流布）。大槻玄沢「蘭学階梯」刊行。
一七八四	天明四	三九	本宿組名主をやめ、村方後見となる。
一七八五	天明五	四〇	高橋景保生まれる。
一七八六	天明六	四一	次男秀蔵（母は法名妙諦）生まれる。この年から翌年にかけ関東、東北地方大洪水、飢饉。前年に関西で買い付けてあった米の一部を近隣に安く売り窮民を救う。残りを江戸で売り大利を得る。林子平「三国通覧図説」を刊行。

一七八七　天明七　四二　徳川家斉十一代将軍となる。

一七八八　天明八　四三　三男順治生まれる。二女シノ死去。

一七八九　寛政元　四四　三女コト（琴）生まれる。　老中・松平定信、寛政の改革をはじめる。

一七九〇　寛政二　四五　内妻・妙諦死去（二六歳）。仙台藩医桑原隆朝の娘ノブ（信）を三人目の妻に迎える。領主・津田氏に隠居を願ったが許されず。

一七九一　寛政三　四六　家訓を書き、家業の実務を長男景敬に任せる。林子平「海国兵談」刊行。

一七九二　寛政四　四七　津田氏から三人扶持を与えられる。幕府、林子平を罰し、「三国通覧図説、海国兵談」を絶版とする。ロシアの使節ラックスマンが根室に来て通商を求める。

一七九三　寛政五　四八　近隣の津宮村の名主・久保木清淵などとともに関西に旅行する。

一七九四　寛政六　四九　隠居が認められ、家督を長男景敬に譲る。通称を勘解由と改める。大槻玄沢ら洋学者が「おらんだ正月」を祝う。（寛政六年閏一一月一一日は、一七九五年一月一日）

一七九五　寛政七　五〇　江戸の父のもとで療養中だった妻ノブが死去する。江戸に出て深川黒江町（江東区門前仲町）に住む。高橋至時幕府天文方となる。間重富も暦局に　入りともに改暦に当る。忠敬、至時（三一歳）の弟子となる。

一七九七　寛政九　五二　白昼、日本で初めて金星の南中を観測する。

一七九八　寛政一〇　五三　エイ（栄）を内縁の妻とする。　近藤重蔵エトロフ島探検。

一七九九　寛政一一　五四　幕府、知内川以東の東蝦夷地を直轄地とする。暦局出向の津和野藩士・堀田仁助、奥州と蝦夷地南岸を概測。　至時の師匠・麻田剛立死去。

一八〇〇　寛政一二　五五　閏四月～一〇月、蝦夷地と奥州街道を測量する。間宮林蔵と会う。

一八〇一　享和元　五五　天明年間の窮民救済の功績により、幕府勘定奉行から苗字帯刀を許可される。四月～一二月、伊豆から陸奥までの東海岸沿いと奥州街道を測量。

一八〇二　享和二　五七　六月～一〇月、陸奥から越後までの海岸線と越後街道を測量する。

一八〇三　享和三　五八　二月～一〇月、駿河から尾張、越前から越後の海岸線や街道、佐渡島を測量する。糸魚川で現地の藩役人と考えの違いがあって、勘定所に訴えられる。高橋至時「ラランデ暦書管見」を著す。

一八〇四　文化元　五九　師・高橋至時四〇歳で病死。日本東半部沿海地図を作成、幕府に提出する。その出来ばえが良く将軍家斉の上覧を受け、幕臣となる。ロシアの使節レザノフ長崎に来て通商を求める。

一八〇五　文化二　六〇　二月より紀伊半島から岡山の海岸線を測量。岡山で越年する。

一八〇六　文化三　六一　瀬戸内海の山陽道側の海岸線と島嶼、山陰地方の海岸線や隠岐島を測量。孫の三治郎（忠誨）が生まれる。

一八〇七　文化四　六二　畿内、中国地方など第五次測量地域の地図を作り上呈する。

一八〇八　文化五　六三
一月より四国、淡路島の海岸線と大和、伊勢街道を測量し、伊勢で越年する。夏、間宮林蔵と松田伝十郎がカラフト探検におもむき、カラフトが島であることを確認。七月、間宮単身で再度カラフトへ行く。

一八〇九　文化六　六四
四国・大和などの地図を作り上呈する。高橋景保は幕府の命により、伊能図をもとに日本輿地図藁を作成する。八月より中山道、山陽道の街道を測量して、豊前小倉で越年。六月、間宮林蔵、カラフトが島であることを実証。

一八一〇　文化七　六五
一月より九州東・南部、天草諸島などを測量して、大分で越年する。長女イネの夫盛右衛門死去。イネは剃髪して名を妙薫と改め、佐原にもどる。

一八一一　文化八　六六
大分を出て、九州から中国地方の街道、甲州街道などを測量して、江戸に戻る。間宮林蔵、江戸で忠敬宅をしばしば訪問。一一月より相模、甲州の街道などを測量しながら九州へ向かう。　摂津の郡山宿で越年。

一八一二　文化九　六七
九州に渡り、筑前、筑後を測って、屋久島、種子島に渡海する。肥前の賤津浦で越年する。

一八一三　文化一〇　六八
九州北部の街道、壱岐、対馬、五島列島および中国地方の街道を測量し、姫路で越年する。長男景敬（四七歳）死去。副隊長の坂部貞兵衛（四二歳）五島列島の福江で病没。　暦局の高橋役所火災。書籍、書類焼失。

一八一四　文化一一　六九
近畿地方などを測量しながら江戸に戻る。江戸での居宅を深川黒江町から八丁堀亀島町の桑原隆朝宅跡へ移し、地図御用所とする。高橋景保御書物奉行を兼任。

一八一五　文化一二　七〇
二月三日より一七日かけて江戸府内第一次測量を行う。四月より下役、内弟子を伊豆七島などの測量に派遣す

一八一六　文化一三　七一
閏八月～一〇月、江戸府内第二次測量。忠敬は孫忠誨を伴って時々測量に出勤した。「大日本沿海輿地全図」の作成にとりかかる。「仏国暦象編斥妄」を著す。間重富死去。

一八一七　文化一四　七二
「大日本沿海輿地全図」の作成を続行。体力がとみに衰える。

一八一八　文政元　七三
四月一三日（太陽暦では五月一七日）八丁堀亀島町の自宅で死去。喪を秘して地図制作を続行。遺骸は遺言により、浅草源空寺の高橋至時の墓側に葬り、爪と髪は菩提寺の観福寺（佐原）に葬った。戒名は有功院成裕種徳居士。

一八二一　文政四
天文方の下役、門弟たちの協力により「大日本沿海輿地全図」（合計二二五枚）および「大日本沿海実測録」（一四巻）が完成し、高橋景保の序文をつけて幕府に上呈された。忠敬の喪を公表する。忠敬の功績により、

一八二二　文政五　孫忠誨に五人扶持と江戸に屋敷が与えられ永代帯刀が許された。

一八二三　文政六　長女イネ死去。忠誨、佐原に帰る。佐藤一斎、忠敬の墓碑銘を書く。

一八二七　文政一〇　浅草源空寺に忠敬の募碑が建立される。

一八二八　文政一一　孫忠誨死去（二一歳）。大槻玄沢死去。

一八二九　文政一二　オランダから派遣されたドイツ人医師シーボルトが、高橋景保から入手した伊能特別小図など国禁の図書多数を持ち出そうとしたことが発覚。

一八三四　天保五　高橋景保獄死。シーボルト国外追放される。

一八六一　文久元　シーボルトが伊能特別小図の写しをクルーゼンステルンに送って意見を求めたところ、絶賛の返事を得た。

一八六三　文久三　アクテオン号を旗艦とするイギリス海軍の測量艦隊が来日し沿海測量と測深を行った際、監督のため乗り込んだ幕府役人が持ち込んだ伊能小図を艦長ワード中佐が見て、正確な地図であることを知り、幕府に依頼して同図を譲り受け、沿岸測量を中止し、主要地点の経緯度の観測と測深をおこなって引き揚げた。

一八六五　慶応元　イギリス海軍水路部は「日本政府の地図から編集」と明記して「日本近海の海図№２３４７」を大改訂した。これはイギリス海軍が入手した伊能小図にもとづいたもので、これ以降、諸外国製の日本地図が見違えるほど正確なものとなった。

一八七〇　明治三　幕府開成所より伊能小図をもとにした「官板実測日本地図」木版刷を発行。

一八七一　明治四　大学南校より「官板実測日本地図」（改版）と、「大日本沿海実測録」を発行。

一八七二　明治五　伊能特別小図を近代化した「大日本地図」（川上寛編）が刊行される。伊能図を利用した近代地図の第一号である。

一八七三　明治六　内務省測量司が近代地図作成の資料として伊能家から最終本伊能図の控え（副本）を借用する。

幕府の紅葉山文庫に保管されていた伊能図正本は、万国博出品用に模写をおこなうため、太政官の地誌課に貸し出されていたが、五月、皇居炎上の際に焼失した。